

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(24) 平成13年6月1日

農政・救荒シリーズ

遠藤勝助の救荒書『救荒便覧』(Q611-29)

遠藤勝助(寛政元(1789)~嘉永4(1851))は別名^{かくしゅう}霍州といい、徳川末期の紀州藩儒官です。江戸赤坂藩邸内明教館で書籍収集や校舎拡張などの館整備事業や師弟の教授のみならず学資を給付するなど人材育成に努めました。当初は朱子学を講じましたが、^{わたなべかざん}渡辺華山との親好を深めるに従い、その影響で蘭学に興味を持つようになりました。また武道にも優れ田宮流剣術の達人でもあります。

高野長英の獄中手記『^{ばんしゃそうやくしゅうき}蛮社遭厄小記』によれば、遠藤勝助は、天保の大飢饉の際に餓死者や飢民があふれかえる状況に嘆息し、実学を研究する傍ら救荒の諸書を著述し、諸大名もその講説を求めたとあります。即答できない質問に対しては、「^{しやうしかい}尚齒会」を開き大小都下有名の士を招き「衆人の議論」の上回答したとあり、勝助こそ開明的知識人を集め飢饉対策を講じた尚齒会の創設者といわれています。また、尚齒とは年齢を尊ぶという意味で、飢饉をしのぎ長生きすることが会の名の由来となっています。さらに渡辺華山や^{たかのちやうえい}高野長英とも^{ばんしゃ ごく}蛮社の獄で幕政批判の罪で処罰されたのに対し、勝助は急進的な蘭学者とみなされず、難を逃れています。

『救荒便覧』は前集1巻、後集2巻、続集1巻の合計4冊からなり、成立は前集1巻天保4年、後集2巻天保7年、続集天保8年となっています。当館久能文庫にはその内、前集以外の版本3冊を所蔵しています。前集では救荒書の紹介、名君賢臣の言行をとおしての飢饉への戒め、富者や貧者への戒め、飢民を救う心得、飢饉の年数と気候の考察などから飢饉時に有用な食料品やその効用さらには救急法まで詳しく説明しています。後集では前集を補筆することを目的とし、救荒に関する必読の書物を挙げ、続いて名君賢臣の言行中から救荒や貧民救済に関する歴史上の事跡を記述しています。また飢饉時食用できる植物を絵入りで詳細に記述しています。続集では、飢民への実際上の救済法を紹介し、粥の配給に重点をおき解説しています。その内容は細部にわたり、粥の煮方から粥場の設計図、粥をふるまう手続きや粥配給の際の役人の心得にまでおよび、粥の配給による飢民救済を成功させるために、士・農・工・商各身分を戒めています。『救荒便覧』は、細部にわたる飢民救済方法の記載から救荒書中最も完備しているものの1つとされています。

参考文献

- 『日本経済大典 15』(332/192)
- 『和歌山県史 人物』(218.66/9)
- 『南紀徳川史 6巻』(218.66/1)
- 『洋学史研究序説』(402.1/24)
- 『渡辺華山』(281.08/101)